

第三百五十八回 青葉会

平成二十八年一月二十八日(木)

初句会

午後五時半〜八時半

丸紅来客食堂(談話室)

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤保明 小西弘子

豊田ゆたか 中野一灯 星田啓子 山崎亜也 山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 宮内規雄

渡邊盛雄

赤田堅 安部眞希子 小川恭延 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明 村田くに子

山崎青史 山本三恵

《互選句》

十一點

☆ 短日や貨車長々と橋渡る

孤舟 (万・五・龍・敏・灯・允・正・啓
く・亜・天)

七點

☆◎ 後ろ手の我が影と行く初詣

忠彦 (眞・万・孤・允・啓・く・三)

六點

☆◎ 女の子ばかりが木登り小正月
(☆…「が」をトル)

弘子 (眞・猛・万・孤・保・ゆ)

◎ 初夢のするりと溶くる朝日かな

全 (恭・忠・孤・五・啓・天)

☆◎ マフラーを押し上げ隠す本音かな

正明 (眞・万・孤・啓・亜・天)

◎ 初湯してこの一年の四肢に触る

盛雄 (恭・忠・孤・弘・龍・く)

☆ 復興の酒蔵からの初荷くる

紀久男 (眞・忠・万・正・青)

(☆・正↓「初荷かな」)

☆◎ 胸反らし軍鶏(しゃも)羽搏けり初茜

一灯 (万・孤・允・啓・青)

☆◎ 雪の夜の一人の言葉遊びかな

規雄 (万・孤・ゆ・青・三)

(☆↓「雪の夜を独りの・・・」)

☆ 蠟梅や触覚で嗅ぐ香りかな

亜也 (堅・猛・恭・万・敏)

(☆…一句の中に「や」と「かな」のように二つの切字を入れることは避けたい。↓「蠟梅の香こそ触覚もて聞かむ」。香りを嗅ぐことを聞香という)

☆ 器量よき柚子のすり寄る冬至の湯

天牛 (堅・万・灯・亜・三)

(☆↓「器量佳き柚子と触れ合ふ・・・」)

☆ めでたさや屠蘇の微醺の三番叟

恵洲 (堅・紀・万・青)

(☆↓「三番叟めでたく屠蘇の微醺かな」)

☆ 生かされて生くる幸せ去年今年

昇 (保・ゆ・允・く)

☆ 野に佇ちてかえりみる世や冬木の芽

盛雄 (堅・万・ゆ・三)

(☆↓「冬木の芽野に佇ちて世を省みる」)

☆ 冬天を揺す振つてゐるちんどん屋

孤舟 (万・正・天)

(☆↓「雪空を揺さ振つてゐる・・・」正↓「凍て空を揺さ振つてゐる・・・」)

☆ 雪深々モノクロ世界の武家屋敷(角館)

保明 (紀・敏・正)

☆ 天ぷらのごく薄衣ふきのたう

弘子 (灯・亜・天)

☆ 大寒や「老人科医よ」と我が主治医

健介 (猛・万・天)

◎ 五大陸あまねく照らす大初日

昇 (恭・孤・弘)

☆ 病終ふ妻に小さき淑気かな

盛雄 (紀・五・三)

☆ 冬の雨独り草食む輓馬かな

そらお (紀・三)

☆ 雪止むや画廊にはかにさんざめく(霜葉展)

紀久男 (保・亜)

(☆↓「初春の正気(せいぎ)が伸ばすわが寿命」)

☆ 新春や晴れて風なく嘉事あらん

猛 (五・龍)

☆ 吸入の酸素濃くなる年の暮

五郎太 (忠・正)

(正…中七↓「酸素重たき」では?)

寒蜩小匙一杯のだし加へ
（「の」は不要） 五郎太（保・青）

☆ 母の死はなんだか重く牡蠣フライ
雪囲ひ真昼の宴も仄暗し 全（忠・弘）
保明（万・五）

（☆…下五↓「仄暗く」）

☆ おけら詣り踊る火縄の抽象画 全（万・灯）
（☆↓「白朮詣り火縄の踊る抽象画」「抽象画踊る火縄や朮詣り」）

雪吊や縄のスカート風に揺れ 全（恭・灯）
全（恭・啓）

去年今年飛び去る時に縫りつき

☆ 寒の街ジャンヌ・モローと聞こへ過ぐ 全（恭・啓）
弘子（紀・正）

☆ 受験子の頬白しまだ幼な顔

☆ ◎ 贈られし友の句集を読初に 健介（万・孤）
恵洲（万・孤）

☆ にこやかに句友集ひて初歌舞伎

☆ 故郷（さと）風の雑煮に欠かせぬ鰯・穴子 全（猛・敏）
ゆたか（万・允）

☆ ふくいくと香る蠟梅母の影 全（堅・保）
一灯（万・弘）

☆ 雲乗する薄氷（うすらい）鯉が鼻で押す 全（五・允）
（☆↓「雲の乗る薄氷を押す鯉の鼻」）

☆ 風花の火の見到光る遠浅間 全（五・允）
正明（堅・紀）

☆ 白黒を付けぬ性格冬木立 昇（万・猛）
新年会卒寿の上司獅子吼する
（☆…三段切れにならないように語順を変えてみたい「獅子吼する卒寿の上司新年会」）

☆ シベリウス今日こそ似合ふ雪や降る 啓子（紀・敏）
天牛（紀・万）

☆ お歳暮は京都老舗の竹箒 全（龍・亜）
賀状来る私の名の字間違へて
寒波去り束の間町は寛げり
初寄席や小三治聴いてほんわか
初春の陽射しを浴びて今年こそ
赤子泣く魔除けと笑ひ除夜の鐘
初句会師の添削を心して

☆ 叶はねど夢語り合ふ新年会 全（紀）
全（保）
忠彦（保）

☆ 鶏旦の朝日は海を染め始む 孤舟（万）
全（く）
全（紀）

（☆…始む↓始め）
白鳥の夕映えの空着て戻る 全（弘）

賛・尾上松緑丈
松羽目に松緑躍る松の内（松尽し） 恵洲（紀）
全（猛）

☆ 初春に適ふ鼓の初音哉（「義経千本桜」） 全（猛）
堂哉（真）
全（天）

☆ ツンドラの大地果てなし初飛行 全（天）
ゆたか（真）

☆ 鶉の嘴（はし）に一丸実南天 全（弘）
全（弘）

☆ 芋美味（うま）き畑の焚火富士かなた 全（弘）
一灯（く）
啓子（万）

☆ 咲き初むる紅梅目白来ては翔つ 全（忠）
規雄（龍）
亜也（万）

☆ 短距離を全力疾走年の瀬は 全（忠）
規雄（龍）
亜也（万）

☆ 巧まらずに雪に紅差す寺の花 全（忠）
規雄（龍）
亜也（万）

●次回青葉会

二月二十五日（木） 午後五時半から八時半

▲当季雑詠五句 投句二句

三月二十四日（木）

二月十三日

丸紅 コンチェルト（談話室）

以上文責 紀久男

平成二十八年一月句会報

一 正月五日、久しぶりの歌舞伎座総見。天牛さん始め20名参加。やはり初芝居は当劇場が一番。松の内のお目出たい気分が味わえ、吉右衛門、玉三郎。芝雀ら大看板の至芸を堪能して、皆様満足されたことと存じます。

はねてから蕎麦の田中屋（松屋八階）で歓談（7名）。すこぶる良い心持で打上げました。

・「茨木」は鳴物みごと初芝居 天牛 吉右衛門の「石切梶原」

・初歌舞伎妻うつとりと玉三郎 忠彦 播磨屋の至芸にひたる初芝居 紀久男

二 初句会は天牛さんら12名出席。投句8名。天牛さんの乾杯の音頭で開始。

一灯さんが傘寿記念に句集「夜霧」を上梓され、皆様にお渡しになり、小生の音頭で祝杯を挙げ、さながら出版祝賀会の観がございました。

弘子さん寄贈の坂角の煎餅、啓子さんの銀座・甘楽の「銀六」（ミニ・ドラ焼き）、天牛さんの美々卯の凍結酒、忠彦さんの大吟醸「刈穂」（秋田）、小生の純米大吟醸「八甲田」（十和田の鳩正宗）と甘辛の銘品を存分に味わい、猛さんの詩吟も披露され大いに盛り上がった次第です。猛さんの披露で御覧のように選者の孤舟さんが最多得点、忠彦さん、弘子さん、正明さん、盛雄さんが好成績でした。

席上、「萬緑」1月号、「爽樹」1月号（創刊五周年記念号）、「蘭」11、1月号を回覧。

「萬緑」に弘子さん寄稿の「昭和の森逍遙・川合絹漱」、眞希子さんの作品の評、青史さんの句の合評のコピーをお配りしました。弘子さんの絹漱論は皆様に好評です。ご希望の方にお贈りします。尚、初芝居見物の集合写真を啓子さんが手渡しされました。社友会ホームページに掲載予定です。あと、好調の伊藤忠（利益トップ、臨時ボーナス、株価）、日経「私の履歴書」掲載中の小椋佳のこと（五郎太さんの同級生）等、話題に上りました。

三 関係者近詠

蟋蟀の合唱へソロ明鳥 万里子 満月と明星の間（あじ）ドローンか 万里子

朝寒や前のめりに急ぐ小学生 全 一夜さに裏木戸埋めし落葉掻き 全

池の面に映る紅葉へ紅葉散り 全 舗装路の目地へ微塵の黄葉かな 全

二重三重落葉筏を漕ぎ分けて 全 搔掘りを覗く項（うなじ）へ散紅葉 全

階を成す木の根の小径秋の汗 全 搔掘りの底黒光り冬日和 全

林檎の季また巡り来ぬ師の句碑へ 全 お向ひの聖樹灯りぬ今宵五時 全

長雨の上がりし真夜に流れ星 全 午後十時聖樹の灯消えまた明日 全

教会の尖塔赤し秋の坂 恭延 教会のバザー姫柚子二個十円 眞希子

敬老日祝はる老いの早さかな 全 国旗より市の旗低し冬の雲 全

雲破れ秋の陽白き玉となる 全 嬰の笑みへ返して泣かれ冬菫 全

——「萬緑」—— 一月号 茶の花や傾ぎて眠る蔵の鍵 弘子

冬麗の鳳凰堂や水の上 允章 日時計の影薄き日も七五三 全

髭面と地酒酌み合ふ枯木宿 全 浅草を寄り添ひ行ける冬立てり 全

弁天の腰嫺やかに冬うらら 全 稲穂飾り揺らし熊手が膝の上 全

靴音のことさら高し今朝の冬 全 先代團十郎五十年祭 全

けなしつつ東京が好きおでん鍋 恵洲 冬あたたか成田屋四代見し自慢 紀久男

小春日や矍鑠の師のベレー帽 全 ——「萬緑」—— 二月号

千円の熊手ながらも三の酉 全 しぐれ来とご婦人に傘差し出さる 規雄

話の腰折られてよりの寒さ哉 全 父の木に少年の柿生（なり）にけり 全

—— 大鉄会12月 —— 「NHK俳句」1月号 池田澄子選

暮れの夢三途を渡れば赤提灯 龍平 父の木に少年の柿生（なり）にけり 全

雪が降るあなたは来ない爛悲し 全 ノーサイドラガー等の笑い地に満てり 全

おぞましきテロ根絶の破魔矢かな 新居齋 ——「朝日俳壇」一月四日 金子兜太選

平成二十八年二月十六日

紀久男記